

令和7年度 第1回 函館市認知症初期集中支援チーム検討委員会 会議録（要旨）

○ **開催日時** 令和7年11月12日（水） 18:00～

○ **開催場所** 函館市総合福祉センター 4階 会議室

○ **議 事**

- (1) 函館市認知症初期集中支援チームの活動状況について
- (2) 認知症施策推進計画の策定について
- (3) チームオレンジの整備について
- (4) その他

出席状況

委 員	川口裕太委員，本間千恵委員，阿部栄里子委員，佐藤静委員，吉田尚教委員， 小林陽平委員，西谷麻紀委員，渡部良仁委員，福島久美子委員，保坂昌史委員， 朝倉順子委員（計11名） 欠席：江刺家泰平委員
報道関係	
事務局	萬矢 福子 保健福祉部高齢福祉課長 二木 直美 保健福祉部高齢福祉課主査（家族介護支援・認知症担当） 山本 紗佑里 保健福祉部高齢福祉課（家族介護支援・認知症担当）

○ 会議要旨

開 会
議 事

- (1) 函館市認知症初期集中支援チームの活動状況について

(山本) (資料1により説明)

(渡部会長)

ただ今の説明について，何か質問・意見等あるか。

(吉田委員)

資料1の(4)事業対象者へのチーム支援の実施結果として，チーム介入後，受診拒否とあるが，医師が自宅に訪問した実績はあるか。

(阿部委員)

富田病院では医師の訪問はしていない。認知症の診断のためには検査が必要，また業務の関係で医師の訪問は厳しい。受診拒否のある場合は，事前に対象者の詳細をまとめたうえで，病院に来

ていただき診断している。介護保険の申請等に必要な書類等も作成している。

(吉田委員)

認知症初期集中支援チームは、医師が訪問できることが特徴だと思う。医師の事情があると思うが、他の自治体では医師と話すとお話を聞き入れる対象者もいた。受診拒否が原因で埋もれているケースがあるのであれば、検討をお願いしたいと思う。

(佐藤副会長)

実績が積み重なることで地域の医療関係者から認知症初期集中支援チームを活用したいという声が出てくるかもしれない。

(吉田委員)

他の自治体ではなかなか支援が進まない場合でも医師が訪問できることが、チームの支えになっていた。医師へ事業の趣旨説明を改めて行ってもよいのかもしれない。

(佐藤副会長)

医療機関へは圏域に関わらず依頼できるようになったのか。

(阿部委員)

圏域で担当の医療機関が決まっているが、過去には検査結果を比較しやすいという理由で、受診歴がある病院に再受診したこともある。

(福島委員)

やはり専門医を受診することが大変。病院の方には、病院の中に連れて来てさえていただければ、と言われる。しかし、連れていくことができないケースが多くある。医師の訪問が可能となると、認知症初期集中支援チームの相談ケースが増えると予想される。

(吉田委員)

法律等に理解があり、協力が得やすい医師であれば、精神科に限らずこの業務の委託は良いと思う。

(福島委員)

認知症疾患医療センターだけでなく、認知症サポート医等か。

(吉田委員)

福祉関係者からの言葉と医師の言葉は対象者の受け取り方が異なり、安心感があるため受診につながることもある。認知症初期集中支援チームの特徴を活かしていけると良い。

(佐藤副会長)

二段構えのように、最初は圏域の医師にお願いし、どうしても事情があり訪問が難しい場合、他の圏域の医師や、認知症サポート医のいる医療機関にお願いすることができると、なお心強いと思う。

(本間委員)

亀田北病院では、数名の医師が認知症初期集中支援チームのケースを対応している。訪問できると良いが、訪問する医師、訪問しない医師のバランスが取れず難しい。

(佐藤副会長)

現在、認知症サポート医の医療機関はどこか。

(萬矢課長)

認知症ケアパス知ってあんしん認知症ガイドブックに掲載している認知症サポート医のいる医療機関は、共愛会病院、函館新都市病院、ピュアこころのクリニック、ゆのかわメンタルクリニック。

(川口委員)

医師によって考え方が異なるため、事前に医師が訪問の必要性を評価していただいた上で、医師に訪問依頼する流れになると思う。

(吉田委員)

認知症初期集中支援チームとしての事業開始時にどのような説明だったかにもよる。医師としての役割、事業の全体像が伝わっていない可能性もある。

(福島委員)

認知症初期集中支援チームの支援件数が少ない理由として、以前共有されたこととしては、認知症初期集中支援チームを活用したい対象者はいるが、地域包括支援センターと認知症疾患医療センターの連携が取れているため、事業を活用せず支援ができる体制が函館市では整っており、通常支援になっているとのことだった。しかし病院受診できず困難化するケースがあることも確か。医師の訪問が可能となると、とても心強いと思う。認知症初期集中支援チームの件数は増えると思う。

(阿部委員)

以前訪問の際「病院の職員です」と伝え血圧測定をし、「血圧が高いから次は病院で待っているから来てね」と伝えると、拒否していた方も受診できた。病院職員が訪問しサービスに繋がったケースもあるため、医師に関わらず看護師等、病院職員ということで受け取り方が変わる場合もある。

(福島委員)

病院から来たということで医師のような目で見ると。わざわざ自分のために病院の方が来てくれたという印象が残る。だがそれでも難しい方がいるため、やはり医師が訪問できることが良いこともある。

(吉田委員)

対象者の方は病院受診で何をするのか怖い、入院させられるのではと思う方もいる。その際、治療の説明や、頑張りましょう等の少しの声掛けで印象は変化する。病院関係者が顔を出すだけで

安心感や、先の見通しが立つことで考え方が変わることは実感する。

(福島委員)

認知症初期集中支援チームとして効果的に支援できた内容を、書面等で地域包括支援センターやケアマネジャーに共有することも一つだと思う。専門職も認知症初期集中支援チームとして支援することに諦めが先にあると思う。そうではないということを共有しても良いかもしれない。

(保坂委員)

前回の委員会での報告を確認すると、認知症初期集中支援チームの事業対象者数は新型コロナウイルス感染症の影響で減少している。現在も回復していない理由はあるのか。相談ケースが少ないのか、相談ケースはあるが事業対象外となることが多いのか。

(佐藤副会長)

認知症の相談件数が増えないことには、認知症初期集中支援チームの事業対象者数も増えない。関係者の中で事業自体が忘れられてしまっていることもあるのか。

(保坂委員)

PRが不足している可能性もある。啓発グッズ等があればと思う。

(佐藤副会長)

事業開始時は研修会を開催する等、広く知られていたが、数年後、新型コロナウイルス感染症の影響もあった。

(保坂委員)

他都市ではどうなのか。先進的な都市も同様に件数が減っているのか。

(二木主査)

先日他都市の保健師と話をした際、やはり同じような状況だが、意義のある事業のため何とか活用したいという話を聞いた。地域包括支援センターで対応した事例については認知症疾患医療センターと連携が取れているため、通常支援で対応できるケースが増えていることもあると思う。相談対応する側が認知症初期集中支援チームについて検討できているのか、今後検証していかなければならない。

(保坂委員)

町会であたまの健康チェックをしていることがある。そのようなチェックを定期的にも実施することで普段行かない方も今度行こうかなと思うこともある。あたまの健康チェックは市で予算確保しているのか。

(山本)

あたまの健康チェックは市で予算確保している。

(保坂委員)

あたまの健康チェックについて周知していくことも一つだと思う。

(福島委員)

認知症に関しての興味関心が高めることも良いと思うが、認知症初期集中支援チームに関しては、相談対応をする地域包括支援センターや、ケアマネジャーが、認知症初期集中支援チームの活用を検討し、つなげられることが必要。事業を開始した当初、事業の説明や、実際について様々な研修会の場で発表や周知をしていた。病院関係者が訪問できるということで、事業が評価されていたこともあったが、現在そのような機会が少なくなったように感じる。

(吉田委員)

やはり認知症初期集中支援チームの特色が失われてきているのでは。以前他の地域で認知症初期集中支援チームの中で病院職員の立場として地域包括支援センターとやりとりをしていた際、最初は通常支援として対応していても、対象者が自宅から出てこない、認知症の診断を受けていない、介護サービスを受けていない、となった際に病院と地域包括支援センターの間で認知症初期集中支援チームとして対応することを検討する。認知症初期集中支援チームの特色をもう一度確認すると良いと思う。相談対応する側が事業を頭に入れながら対応していくことも必要だと思う。

(福島委員)

支援対象者の経過についてPRする必要はあると思う。地域包括支援センターは認知症初期集中支援チーム対象者とした際に、チーム員会議を開催する度に書類の作成等、負担が大きく、通常支援と異なり煩雑になる。一つのケースだけに時間が使えないこともあり、認知症初期集中支援チームとして検討することを諦めている可能性がある。認知症初期集中支援チームの活動マニュアルの中に組み込まれていることはやらなければならないが、負担があるという話は地域包括支援センターの中で話が出ている。

(渡部会長)

他に、何か質問・意見等あるか。なければ議事(2)認知症施策推進計画の策定について事務局から説明願いたい。

(2) 認知症施策推進計画の策定について

(山本) (資料2により説明)

(渡部会長)

ただ今の説明に対し、何か質問、意見等あるか。

(朝倉委員)

市長と語るという機会に、函館認知症の人を支える会として認知症の方と参加し、意見や声を聴いていただいたことがある。そのように本人が参画したうえで進めて欲しい。認知症本人が参加する機会を増やして欲しい。認知症カフェのように、どなたが認知症なのか関係なく一緒に楽しむことが良い。認知症の進行により困りごとが増えるが、他の参加者の体験談を聴き、共有でき

ている。

(吉田委員)

地域で暮らしている認知症の方と、地域で暮らせなくなった認知症の方の声はかなり違うと思う。施設にいる方は家に帰りたいが帰れない。施設に入っている認知症の方の声も拾ってほしいと思う。

(福島委員)

以前、施設に入所されている方、その家族、施設の職員と地域包括支援センター職員で集まり話したことがある。普段言えないことを言うことができる会として好評だった。家族がニコニコしているのを見て、今日来てよかったと話していた参加者もいた。

(吉田委員)

家に戻れない悔しさや悲しみ、そこに直面している家族もやはり大変だが、一番は本人が感じる、もう家に帰れないという絶望感。そのような声を拾っていただきたい。

(阿部委員)

認知機能の度合いにもよるが、帰る家の定義がそれぞれ異なっている。現在住む家、長年住んでいた家が家という方、幼少期に住んでいた家が家という方。施設で長く生活されている方は施設が家という認識の方もいる。外来、入院の方も希望は様々。施設であれば、認知症以外の部分でも、糖尿病でお菓子が食べられない等の制限があり、認知症の方の希望が変化すると思う。施設内で話を聴くことは難しいが、アンケート等であれば認知症本人や家族に聴き、協力できることもある。また、認知症の方や家族と今後の生活について話をしている中で、認知症の方や家族が言ってくださった希望等はお伝えできると思う。

(渡部会長)

他に、何か質問・意見等あるか。なければ議事(3) チームオレンジの整備について事務局から説明願いたい。

(3) チームオレンジの整備について

(山本) (資料3, 資料4により説明)

(渡部会長)

ただ今の説明に対し、何か質問、意見等あるか。

(朝倉委員)

函館市にチームオレンジの具体的な例はあるか。

(山本)

チームオレンジとしての例は、まだ函館市にないのが現状。

(渡部会長)

資料4のチラシはどこに設置しているのか。

(山本)

チラシは市役所本庁舎、各支所、地域包括支援センター、総合福祉センター、老人福祉センター、中央図書館等に設置している。市政はこたてやLINEでも周知。認知症サポーター養成講座は50名の申し込みがあり定員となり受付終了。ステップアップ講座は定員に近い申し込みが来ている。

(川口委員)

対象は高校生以上だが、参加する高校生は多いのか。

(山本)

10代からの申し込みは数名。今回は一般市民を対象とした全市的な認知症サポーター養成講座だが、学生には各学校を対象として地域包括支援センターが講座をする場合が多い。そのため今回の講座に10代は少ない印象。

(渡部会長)

介護関係者にも周知すると受講希望の方がいる可能性がある。函館市医療・介護連携支援センターのホームページに掲載することも一つ。

(佐藤副会長)

ケアマネジャーも受講したい方いると思う。

(二木主査)

講座について補足すると、今回全市的に認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を開催したのは、一般市民の方に広く周知し受講できるようにするため。認知症サポーター養成講座を団体で受講したい場合は地域包括支援センターや市等の講師が出向き講座を開催している。ステップアップ講座は一步進んだサポーター活動を考えている方が対象。既に活動している函館認知症の人を支える会等の団体にもチームオレンジに向けて受講していただくこととしている。今後チームオレンジとして認知症カフェや地域で見守り活動をしたいグループは、認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を受講することで、チームオレンジとなる。団体で受講したい場合は今回の機会の他に、個別で出向いてステップアップ講座を開催する。

(佐藤副会長)

今回の講座の機会だけでなく、別の機会でも講座を受け付けていることが分かるようチラシで周知すると、団体の申し込みがある可能性がある。学校に周知する際は、学校やサークル単位での受講も可能と周知することで受講者が増えると思う。

(川口委員)

学生でも、家族が認知症というケースがある。若い世代の力は大切。

(二木主査)

もう一点補足として、チームオレンジの事例は現在函館市にないが、函館認知症の人を支える会のように、チームオレンジに相当する活動をされている団体もある。そのような団体にチームオレンジに向けて今後ステップアップ講座を受講していただきたい。

(吉田委員)

講座は座学のみか。

(山本)

認知症サポーター養成講座は座学のみ。ステップアップ講座は座学や、認知症の方、その家族と函館認知症の人を支える会の朝倉委員との対談。また、チームオレンジとしてできることを考えるグループワークを行う。

(吉田委員)

講座に現場に触れる機会を組み込むことでイメージが湧く。現在施設と地域包括支援センターで、小学生を対象に認知症サポーター養成講座を施設でできたらという話が出ている。講座後に、認知症カフェ等に子供たちと一緒に参加してもらうことで、より具体的になるのではという意見があった。現場に触れることを組み込むことで、より理解やイメージが湧くと思う。

(西谷委員)

講座に定員の50名の申し込みがあるということは、一般の方にも周知されているということだと思う。学生や団体を対象に周知することが良いと思う。

(朝倉委員)

過去に中学生を対象に認知症の劇をしたことがある。他にも高校生の保護者を対象に、認知症の話をしたこともある。いつでも講座が開催できるということを周知すると良い。認知症サポーター養成講座は認知症の人を支える会の会報にも掲載しており、依頼があれば開催している。今年度はナルク函館はまなすを対象に講座を実施し、40名募集で32名が受講した。認知症の方の参加はなかったが、家族の方に体験を話していただいた。会員4名と伺い、それぞれ介護で悩んだことを一言ずつ話した。その様な方法もあるため、介護体験、認知症の方や家族の声を一緒に聴いていただきたい。また、市役所の書類は簡潔にして欲しい。認知症カフェを開催する際に、計画表と報告書を提出しなければならない。会員の高齢化や少ない人数の中、負担がある。書類に追われると本末転倒。

(渡部会長)

居宅介護支援事業所連絡協議会から居宅介護支援事業所にチラシを配布する等は協力できると思う。

(佐藤副会長)

企業とのタイアップはあるのか。エーザイ株式会社は市民公開講座等が頻繁に開いているため、講座の1コマの中でPRする等も考えられる。講座の中で取り組みを市民の皆さんにPRする時間が欲しいと伝えると良いかも。

(朝倉委員)

以前エーザイ株式会社と協力し、認知症の講座をしたことがある。函館市内の保険会社も、依頼があれば出向く形をとっている会社もある。

(小林委員)

講座の周知については周知場所の検討が大切。開催場所の図書館にまず周知があることが大切。普段認知症に関心がない方が参加すると新たな担い手の発掘になる。講座と関連性が低い場所でも周知することで、関心がなかった市民も講座を知り、参加するきっかけとなる。

(福島委員)

9月に開催の世界アルツハイマー月間 in はこだてのイベントで、認知症サポーター養成講座が毎年図書館で継続して開催していれば、今年は参加できなかったとしても来年は参加したいという動機づけにつながると思う。現在認知症の周知のために五稜郭タワーのオレンジライトアップ等、様々なイベントを実施しているが、講座を定期的にも開催することも良いと思う。

(朝倉委員)

アルツハイマー月間の1ヶ月間の中で、認知症サポーター養成講座を盛り込むと、月間ということも市民に発信でき、興味を持った方の参加に繋がる。今回市役所で展示したことはとても良かった。認知症に関心がない市民も立ち寄る。市役所での展示を継続して良いと思う。

(吉田委員)

以前東京都に行った際、上野公園の光のイベントの中で水素自動車のPRをしていた。クイズに正解すると最後にボールペンが景品として貰えた。函館市でもグルメサーカスの中でブースがあると、普段全く福祉に触れていない方にも参加してもらうことができる。従事の人員確保が必要となるが、イベント内で周知することも重要。

(小林委員)

ショッピングモールの子供の遊び場では、親が待つ時間がある。そのような場所で周知することで、全く興味が無い方も知る機会となる。普段病院の相談員として、医療や介護に知識がない、対応が分からない、関心がない方に、接することが多い。その方に、いかに興味を持ってもらえるかを考えて接している。もともと興味を持っている方とは異なるため、そのような点を重視することも良いと思う。

(渡部会長)

他に、何か質問・意見等あるか。なければ議事(4)その他について、事務局から何かあるか。

(萬矢課長)

本日は多くのご意見をいただき、ありがとうございます。認知症初期集中支援チームは大変意義のある事業。地域の身近な相談窓口である地域包括支援センターと連携しながら、これまでの事例を共有し、事業のあり方について再確認する場を設けることも検討していきたい。また、認知症本人の声を計画に反映する方法として、アンケート等のご意見もいただいたため、計画策定に向けて活かしてまいります。今後も皆さまにご協力をお願いする場面が増えるかもしれませんが、

引き続きどうぞよろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

(渡部会長)

最後に委員の皆様から、意見、質問等ないか。ないようなので終わりにしたい。

(二木主査)

以上を持って、令和7年度第1回認知症初期集中支援チーム検討委員会を終了する。